

# マザーグースの童謡を利用した発音指導 —カタカナ発音から脱するために—

English Pronunciation Practice Using Nursery Rhymes:  
Toward the Elimination of Katakana-based Pronunciation

滝口晴生\*

TAKIGUCHI Haruo

**要約：**日本人の英語発音におけるカタカナ式の発音の影響は絶大であり、英語にはない母音の子音の後に発音することがよく見られる。そのような発音を脱するためには、英語の綴りと発音とを直接結び付ける指導が必要であろう。そこでマザーグースの童謡を利用する方法を試行してみた。目的は、第一に、英単語を連続的に発音できるようにさせる、第二にカタカナ表記では表せない母音の違いを意識させることである。前者は、早口言葉を練習させ、後者は押韻という特徴を利用することにした。特に押韻は、欧米の子供に音素意識を根付かせる効果があることが検証されているからである。方法は、早口言葉を2種練習させ、その効果を別の童謡を読ませることで検証した。結果として、脚韻については日本語にはない習慣のため、短期間で意識するまでには至らなかったが、速く発音させることで、初見の英語でもカタカナ発音をしない場合があることが実証できた。

**キーワード：**英語、発音指導、マザーグース、脚韻

## I カタカナ発音を排す

日本語の便利な特徴はどのような外国語でもカタカナを用いて一応表記できる（実際にできるわけではないので、疑似的な発音としてだが）ことである。韓国名、中国名、アラブ名、フランス語名等々ほぼすべての言語の発音をカタカナにすることによって、それが外国語名であることが瞬時に分かるようになっている。たとえば中国語でも外国語名を簡体字で、あるいは韓国語ではハングル文字で、あらわしているが他の単語との区別は同じ字体なので見分けにくい。しかしカタカナは外国語の音声をそのまま表記できるわけではないにもかかわらず、カタカナの発音を見ただけで、なにか外国語に近い発音をしているような錯覚を日本人は持っているのではなかろうか。中国人や韓国人がどのように感じているかわからないが、同じ字体で、外国語が表記されているので、それが外国語の発音そのものであるという意識が日本人とは微妙に違うのではないだろうか。たとえば日本語で、外国語名をすべてひらがなで表したらどういう印象になるだろうか。

私は今日、テレビどらまの「ふぁーすとらぶ」を見ました。

随分と印象が異なるばかりでなく、非常に読みづらい。日本語の識字効率がよいのは、漢字、ひらがな、カタカナという3種の字体があることである。この中でカタカナは、外来語を表すものとして従来使われてきたのである。その意識がカタカナで外国語を表記できるという意識につながっているようにおもわれる。

\* 言語文化教育講座

もちろん、つぎのようなアンケート項目「あなたはカタカナが外国名の発音そのものを表しているとおもいますか」には、否と答える人が大部分であろう。つまり意識すればわかっているのである。しかし問題は無意識の場合である。外国語の本当の発音を知らない場合、とっさに頭に浮かぶカタカナで発音してしまうのである。その外国語をまったく学んでない場合は致し方ないことであろう。しかし、その外国語を学んだはずなのに、カタカナで発音してしまうことが多々見うけられる。それは学ぶときに外国語を本来の音で学ばないで、カタカナでごまかしておぼえて来たことと、また巷にあふれるカタカナ語が頭にしみついてしまっていることが相まってそのようなことになるのだとおもわれる。

このカタカナ外国語も、多くは実際の発音とは異なる標記になっている場合が多い。たとえば oven は「オーブン」と表記するが、実際の発音は「アヴン」[Avn] である。これは綴りの類推から -o- を [ou] と発音すると誤解したのであろう。同じように onion は「オニオン」ではなく「アニアン」[Anian] である。あるいは逆の場合もある。つまり綴り通りであれば正しいのに、それとは異なるカタカナを当てた場合である。alcohol は「アルコール」[ælkohɔ:l] なのに、「アルコール」にしてしまった。もっともこれは英語ではなくフランス語からカタカナにしたのかもしれないが。さらには英語とは全く違う単語にしてしまうという例もある。「ナルシスト」である。これは英語では narcissist 「ナーシシスト」である。ギリシア神話のナルキッソス（英語では Narcissus）に由来する単語であるが、接尾辞 ist を付けてナルキッソス的な人という意味で、この単語ができたのである。そうすると言葉の作り方から言うと「ナルシスト」という言葉は Narc-ist となり、Narcus(?) という単語があることになる。これでは意味不明である。「ナーシシスト」というのは長いし、言いにくいので日本人の癖で縮めたということになるのであろうが、言葉の成り立ちを無視したものである。このような間違っただカタカナ語は、一人の（あるいは数名の）誤解が日本中に広まってしまったわけである。このように例を挙げれば切りがないのであるが、それでもなんとか通じることもあるだろうし、「ナルシスト」のように通じないこともあるし、場合によってはとんでもない誤解を起こすということもあるかもしれないのである。

しかし、カタカナがそれなりに英語の発音に近く表記されている場合がないわけではない。たとえば「クリスマス・ツリー」の「ツリー」である。綴りからは tree を「トリー」と表記されるのが、「トリートメント」のような例から、予想されるのであるが、「ツリー」としたことは、綴りからではなく、実際の発音を耳にしてカタカナにしたのだと思われる。今は使われなくなったが、女性の下着で「ズロース」というものがあつた。この英語は drawers [dɹɔ:z] なのであるが、綴りからだと「ドロワーズ」と表記されそうなところであるが、そうならなかったのは、おそらく実際の発音を耳にしていた誰かが「ズロース」といい始めたのだと思われるし、それを耳にする機会が多かつた時代でもあつたのであろう。耳だけから表記すれば、dream は「ズリーム」になつたかもしれない。

このカタカナ発音をなくさないかぎり英語（ここでは外国語を英語に限定して考えることにする）を外国語として発音できるようにはならないのである。カタカナを用いて発音指導をするという論もあるのであるが、そもそも日本語にはない音をどうやってカタカナで表すことができるだろうか。たとえば英語の f 音はカタカナで「ファ」とか「フィ」と表記するが、「ファイル」を英語音 [faɪl] と発音している日本人はいないのである。つまりいくら「ファ」と表記しようが、それは日本語の「ふぁ」という音なのである。f 音はまだいい、th 音はどうやってカタカナで表記できるのであろうか。特殊な約束事を決めてカタカナで表記するというのもできるが、そのようなまわりくどいことをするよりも発音記号の一文字を覚えた方がよっぽど楽であり、汎用性がある。とにかくカタカナで英語音をすべて表記することは非常にむずかしい。というよりもカタカナ発音は日本語発音にほかならないと認識しておいたほうが間違いがないのである。

カタカナで覚えた音が実際の英語の発音と異なるということが問題であるが、それよりもっと重大な問題がカタカナにはある。カタカナは日本語であるので、いま言ったように、その発音は日本語の発音になるということである。日本語は通常基本的に一文字の発音に母音が必ず含まれるということがある。つまりカタカナの「ストリート」は、母音が4つ含まれることになる。ところが英語の street は -ee- の部分のみが母音である。-s- は「す」ではないし、-t- は「と」ではない。/s/ は口蓋と舌の間にできた隙間を通る息の音だけである（擦過音）。/t/ は口蓋に着けた舌に息をつめて、舌を離れた時に息が破裂する音（破裂音または閉鎖音）である。どこにも母音はない。声帯が振動していない。つまり声は出ていないのである。これを「ス」や「ト」というと、声、つまり母音が発音されてしまう。日本人の発音で一番特徴的なのは最後の「ト」である。英語では母音なしの音でおわるところが、その後に「お」という音が聞こえてくるのである。「イット」、「ホット」、「セツト」などみなこの発音になってしまっている。カタカナの影響やおそるべしである。

英語を発音するのにカタカナを当てるのはとにかくやめて、英語の綴りそのものを理解しなければならない。英語の表記は文字が音素を表している。日本語文字は、「あ」「い」「う」「え」「お」を除けば、音素をあらわしていない。「た」は /t/ と /a/ というふたつの音素から成り立っているからである。アルファベットの表記は、音について言えば、より分析的な表記であることがわかる。ハングル文字も一種のアルファベットである。アルファベットは音素であるとして、それぞれの文字があらわす音を個別に発音できなければならない。つまり「ストリート」であれば、/s/, /t/, /r/, /i/, /t/ をそれぞれ区切って発音できなければならない。そしてそれらの音が連続して発音された時、street の音になるのである。子音が並んだあとに母音が来たり、母音のあと子音でおわるという英単語の特徴をまずは理解しておかないと英語の発音はできないのである。

## II マザーグースの童謡で何を意識させるか

さてマザーグースの童謡を学ぶことで、カタカナ発音から離れることができるだろうか。その目的であれば、別にマザーグースの童謡でなくとも、やさしい英詩でもよいし、やさしい物語でもよいのであるが、やはりマザーグースの童謡が持っているリズムと親しみやすさは別格であり、英米の子供たちが自然に覚えこんでしまうという魅力を利用する手はないのである。

### 1. 母音の違いを意識させる

日本人にはなかなか cat の -a- [æ] の発音ができない。cat は「キャット」とカタカナで表記するので、これを「カット」と発音する人はまずいない。この -a- は Japan の後ろの -a- と同じ音でもある。ところがこちらは「ジャパン」と表記するために「ジャピヤン」と発音するひとはまずいないだろう。「キャット」とカタカナで表記するのであれば、「ジャピヤン」と表記すべきである。しかしカタカナで「ジャピヤン」と発音すると、英語の Japan の発音にはならないだろう。というのも「ピヤ」は半母音の [j] という音が入り込んでくるからである。あくまで [æ] は一音として発音されなければならない。そこで仕方なく「ジャパン」と表記したとも考えられるが、真相はそもそも [æ] の音であることを意識していなかったということであろう。この [æ] の音一つで別の単語になるということ日本人はあまり意識していないように思われる。mad-mud, lack-luck, flash-flush などの例で分かるように、その一音で単語の意味が異なる。まずこの音と普通に発音できる cut の [ʌ]（日本語の「あ」で代用）とを厳密に区別して発音できるようにならないといけないのである。

この音の違いを一種の言葉遊びから学ぶことができる。マザーグースの童謡にある早口言葉である。この童謡では butter と batter という言葉の対照であり、[ʌ] と [æ] の音の違いで、単語は異なる

ものとなる。早口言葉というのは、言い損ねたらそこで失敗となるものである。この童謡ではこの二つの音を発音し間違えると（もちろん間違えるように仕組んであるわけだが）失敗となる。

Betty Botter bought some butter,  
 But, she said, the butter's bitter;  
 If I put it in my batter  
 It will make my batter bitter,  
 But a bit of better butter,  
 That would make my batter better.  
 So she bought a bit of butter ....<sup>1</sup>

この童謡では, butter, batter の発音に, さらに better, bitter, Botter という発音の似た単語も加えて, 母音の音を正確に発音し分けることが要求される。この童謡を真剣に練習させることが, [æ] の音を意識しない日本人にその音を意識させる有効な手段になるように思われるのである。

母音の違いを認識させるために, たとえばこれから文字を習い始める子供にも有効とされている方法は, 脚韻 (rhyme) を用いる方法である。たとえば cat, sat では単語の最初の部分, -c-, -s- は違っていてもそのあとは音としては同じ音 -at [æt] になっているのである。この最初の部分を onset といい, 同じ音の部分を rime という。言葉を学び始める幼児において, 童謡を学ばせることが, この単語が音素に分解されることに気づかせることにおいて, 役立つことが立証されているという (Goswami 2001)。欧米の子供はかなり早い段階で (2歳を過ぎたごろから), つぎのように単語を音素に分解して, 自分で押韻となる単語を当てはめたり, 押韻に合うように単語を作り出すことができるという。

I'm a whale  
 This is my tail  
 I'm a flamingo  
 Look at my wingo  
 The red house  
 Made of strouss (Crystal 1998)

このように脚韻に気付くことは, 綴りと音との関係を明瞭に把握させることになる。次の童謡では, rime 部分の綴り, -and が同じ音であることは明瞭であるが, -eet と -eit が同じ音であるという認識を生じさせるであろう。

Every lady in this land  
 Has twenty nails upon each hand  
 Five and twenty on hands and feet  
 All this is true without deceit.

次の有名な “There was a man of double deed” の最後の部分の 2 行では, heart という特異な綴りの rime が smart のそれと同じ音であることを示す。

When my back began to smart,  
 ‘Twas like a penknife in your heart . . .

次のものは, [ɔ:] の発音の綴りと [ə:] の発音の綴りを示している。

As I was going by Charing Cross,  
 I saw a black man upon a black horse ;  
 They told me it was King Charles the First—  
 Oh dear, my heart was ready to burst !

rime の綴り -oss と -orse の音が同じであるのは日本人には驚きとまらないだろうか。

つぎの脚韻では日本人があまり意識していない [ou] の発音を 4 行とも繰り返しているのである。

Poor old Robinson Crusoe!

They made him a coat,

Of an old nanny goat,

I wonder how they could do so!

ここでも「クルーソー」ではなく、「クルーソウ」であることが一目瞭然である。このような例はいくらでもあるので、これくらいにしておく。このように脚韻というものが綴りと発音の関係に着目させるよい教材であるようにおもえる。気づいたとき脚韻の例を書き留めておくと使えるデータが蓄積するであろう。

## 2. 英語を連続的に発音すること

童謡が、しかしながら最も発音に役立つと思われるのは、個々の単語の発音以上に、英語としてリズムカルに発音することを訓練できるということではないであろうか。つまり、個別の母音や子音が発音できることがまず第一であるが、それらが単語として発音され、さらには単語の連なりとしての文が発音できなければならない。しかし英語を英語のリズムで発音するというのはそう簡単にできるものではない。というのも文の意味、各文の中の要素、すなわちフレーズを認識できなければ、文を意味に沿って発音できないからである。しかしマザーグースの童謡では、意味が分からなくとも、ある一定のリズムがあるので、平たんに発音し始めても、次第に単語の流れが生み出すリズムに気づくことになるであろう。たとえば調子が非常に良いマザーグースの例としては、次の童謡があるが、最初はうまく発音できなくても、練習によって一定のリズムで読めるようになるであろう。

Pat a cake, pat a cake, baker's man,<sup>2</sup>

Bake me a cake as fast as you can;

Pat it and prick it, and mark it with B,

Put it in the oven for baby and me.

ところで、この童謡を、カタカナ発音に慣れてしまった学習者はどのように発音するであろうか。予想される発音は、つぎのようになるに違いないのである。

パット ア ケイク, パット ア ケイク, バイカーズ マン

英語では、母音で始まる単語は前の単語の終わりの子音と合体するので、実際の発音はつぎのようになる。

Pata cake, pata cake, baker's man

「パットア」ではなく「パタ」と発音される。英語にはない「お」に相当する音が発音されるはずはないのである。カタカナ発音をしている学習者は、なかなかこの「パタ」にならない。どうしたらこの「パタ」に移行させることができるだろうか。その方法こそ本稿で考えてみたいことなのである。

## III 実験

そこでカタカナ発音から少しでも抜けることができるのかひとつのシンプルな実験を行ってみた。その手順は下記のようなになる。

- ① なんの予備知識もなく Pat a cake を読ませる。すなわち初期状態の発音を記録する。
- ② 二つの早口言葉を一週間練習させる。

- ③ もう一度 Pat a cake を発音させ記録する。
- ④ 初期状態と一週間後の発音を比較する。

練習させた早口言葉は次のものと上掲の Betty Botter である。

Peter Piper picked a peck of pickled pepper;  
A peck of pickled pepper Peter Piper picked;  
If Peter Piper picked a peck of pickled pepper,  
Where's the peck of pickled pepper Peter Piper picked?

Peter Piper をカタカナ発音で発音すれば、予想される発音はつぎのようになりそう。

ピーターパイパー ピックド アペック オヴ ピクルドペッパー

この部分における「ド ア」とか「ク オ」のところがまさしくカタカナ発音であり、英語にはない音が発音される。このまま発音速度を上げると「ドア」や「クオ」は二つの母音ではなく、まるで2重母音であるかのような発音になるであろう。いくら速く発音してもそれではまだ英語の発音ではない。カタカナの意識が抜けない限り「ドア」、「クオ」が発音されるであろう。

そこで綴りに注目させ、そのような音はなく、picked a peck of a の部分が picked-a peck-of-a と発音されるように練習する。この場合 picked の [d] が無声音化し、[t] の音になることも指摘しておく。

これを各自が、1週間の間、自分でできるだけ速く、しかもできるだけ正確に発音できるように練習しておく。

もう一つの早口言葉 Betty Botter は、前に述べたように母音の違いを正確に発音し分けなければならない。同時に Peter Piper に見られるような音の連続が生じる部分がある。“If I put it in my batter” や “But a bit of better butter” の行であり、これは If-I put-it-in my batter や But-a bit-of better butter と発音するように注意を与えておく。

これも Peter Piper と同じように1週間自己練習させる。

実験対象としたのは大学1年生の英語の初級クラス(31名)であるので、<sup>3</sup> 比較的英語が不得意な学生のクラスということになる。

## IV 実験の結果

さて、その結果はどのようなものになったのだろうか。筆者が期待するように、カタカナ発音から抜け出る学生があらわれたのだろうか。結果は少数ではあるがイエスと言えるものであった。残念ながら録音に問題があったために、初期音声記録できたのは8名だけであった。したがって初期音声と1週間後の音声と比較できたのはこの8名だけである。<sup>4</sup> 非常に乏しいデータであるので、確信的には言えないのであるが、しかしひとつの傾向を示唆しているように思えるのである。

筆者が予想した通り、初期音声では次のような発音が顕著にみられた。

パットアケイク, パットアケイク, ベイカーズ マン

ある意味ほぼ全員に近い被験者がこのように発音している。<sup>5</sup>

被験者の一人は初期音声でもかなり速く発音をしており、それは Pat-a cake になっているともいえる発音であった。

そして1週間後の録音の結果は、「ほぼ変わらず」が5名、「読む速度が速くなった」が2名、「カタカナ発音が変わった」が1名である。変化なしのうち2名(1名は留学生)は初期段階で Pat-a cake になっていたため、その意味での変化はなかったのである。そうすると発音が変化した1名が存在したということがこの実験に意義を与えることになるだろう。

この1名の被験者の初期音声は、まさにカタカナ発音であった。しかし、1週間後にははっきりと Pat-a cake になっていたのである。この被験者は練習している段階のどこかで、カタカナ意識が消失したようにおもわれるのである。まれな例ではあったかもしれないが、早口言葉の練習に意味があつと考えたい。

## V 反省と今後の展望

今回 Pat a cake を題材に選んだのは比較的短く、またリズムカルに読めることである。また“Pat it and prick it, and mark it” “Put it” という連続音を習得しやすいフレーズがなっていることもあった。

実は Pat a cake の“man”と“can”の脚韻にも注目させたのであるが、こちらのほうはまったく無視されてしまった。練習した早口言葉に脚韻が含まれていなかったことに起因しているかもしれない。したがって Betty Botter で練習した成果が検証できなかつたので別の童謡を用いて検証を行う必要があるだろう。上に述べたように欧米の子供たちと違って、厳密に脚韻と呼べるものがない日本語母語者に、英語の詩における脚韻を意識させるのはもう少し童謡に触れさせる必要があつたであろう。しかしながら3歳児の押韻認知と音声スキルとの有意な関係が示され、しかもその能力は継続し、さらにはリーディングスキルとも関係していると言われている (Maclean, Bryant, & Bradley 1987)。欧米の子供とは事情が異なるにしても、今後押韻を利用した英語の音声と綴りの関係認識に至るような童謡の教育利用を考えてもよいのではなかろうか。

参考資料として、初期録音がない被験者に、1週間後と2週間後の音声を録音してもらったが、<sup>6</sup> 1週間余分に練習した効果があるのか、ほぼ半数の被験者は Pat-a cake の発音になっていた。とりわけ注目したいのは、“prick it, and mark it”と“Put it”の部分であり、ここはほぼ3分の1の被験者が prick-it, mark-it, put-it というように連続させて発音していた。Pat-a よりも発音しやすかつたのであろう。また速く読もうとすれば自然にそのような発音になつたのであろう。

今回の実験は音読練習を自己練習にしたので、実際に被験者が、どの程度練習したかはわからない。それでも読む速度が格段に速くなっている被験者はそれが練習の成果であると思わせるものがあった。そうすると自己の練習に任せないで、教師が一定期間発音をチェックしながら練習させることで、かなりの発音の矯正ができるのではないであろうか。早口言葉をほぼ完璧に発音できるように練習すれば、それ以外の英語の発音も格段に変わってくるのではないかと思われるのである。

簡単な実験ではあつたが、ターゲットを絞って、童謡を適切に選択することで、より効果の出るプログラムができるのではないかと考えている。

References

- Crystal, David (1998). *Language Play*. London: Penguin.
- Goswami, U. (2001). Cognitive development: No stages please—we're British. *British Journal of Psychology* 92, 257-277.
- Maclean, M., Bryant, P. & Bradley, L. (1987). Rhymes, Nursery Rhymes, and Reading in Early Childhood. *Merrill-Palmer Quarterly* 33, 255-281.

資料

Betty Botter bought some butter,  
But, she said, the butter's bitter;  
If I put it in my batter  
It will make my batter bitter,  
But a bit of better butter,  
That would make my batter better.  
So she bought a bit of butter  
Better than her bitter butter,  
And she put it in her batter  
And the batter was not bitter.  
So 'twas better Betty Botter  
Bought a bit of better butter

---

<sup>1</sup> 全文は資料として本稿末尾に示した。童謡の引用は *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes*, ed. I. & P. Opie, Oxford: Oxford University Press, 1951 による。

<sup>2</sup> *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes* では“Pat-a-cake”というようにハイフンで結ばれているが、予見を与えてしまうので被験者に提示する際にはハイフンを除去した。

<sup>3</sup> 山梨大学では1年次の英語クラスはプレイスメントテストの結果によって3つのレベルに分けられている。初級はその一番下のレベルのクラスである。

<sup>4</sup> その他の被験者は一週間後の音声を録音し、さらにもう一週間練習して音声を録音させた。後者は参考資料として用いるほかはなかった。

<sup>5</sup> ただし中国語母語留学生在が一人含まれていて、Pat-a cake の発音ができていた。中国語を母語とするためカタカナ的発音の影響は見られないということであろうか。

<sup>6</sup> 実際に2週間分の音声を提出した被験者は9名であった。